

猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ⑨ 田宮治

梯子の一戦

平成二十二年十二月二十六日の日曜日に、頂点付近の崖に差し加かっていて、これがなければ絶対に登頂できないと思う執念の一戦がついにやって来た。

私が推し進める止め猪猟の要点は昨猟期一秋までで、ほとんどができるように急成長を遂げている。残るグレ猪や追われ慣れた猛猪対策にも懸命に取り組み、十二月になってやっと思いどおりの実戦を敢行できるまでになってくれた。

「よし、今日はグレ猪対策の要点である『戻りタツ』を俺流でやってみせる」と心に決めていた。

その猟場は、前日の土曜日に猪が逃げ込んだ大峰の続きで、先端

はぐるっと回る県道で区切られた、止め犬猟では攻めづらい場所である。

今日のターゲットは、あと二頭残っている小物の親で、六、七〇の牝猪である。これがなかなかの曲者で、何度も戦っているが、仔猪を見事に守り、自らは犬たちの楯となって逃げまくり、思ってもよらぬ方角に姿を消す。

一週間前にも早立ちして、この峰のどん詰まりまで逃げ、私が犬たちと追い詰めると、何と私に向かって来たのである。

本来ならば、この猪を大峰の先端をぐるっと回って追い切り、左側の小沢で張っているタツに嵌め込むつもりだったが、その思惑は見事に打ち砕かれた。絶対に来ないと思つた私の目の前に突いて飛び出し、一瞬で小峰の裏の見えな

い竹藪伝いに小沢を駆け下り、右下をUターンするように堂々と元の寝屋立ちした方向に戻り、逃げ切ったのである。

当然、私もこの鉢合わせした瞬間に思い切り猛者を引き寄せ、一発で仕留めようと銃を構えたが、敵もさるもの、私より先に感知して、一瞬で見えなくなってしまうのである。

今日はその牝猪との再会を期待して、独断で考案した「戻りタツ」と「移動タツ」を混ぜ合わせた変化球を使いこなす田宮流の革新作戦であり、二、三人猟で実践する「グレ猪猟の完勝法」なのである。

基本的には、大山で狩り進む時に勢子長と、峰下の沢底までが広く開く大猟場の「戻りタツ」の原理である。グループ猟では、獲物が戻って逃げないように安全対策

のために張るタツである。

二、三人で行う猪猟での「戻りタツ」は、大切な一人を置くほどに重要なタツで、このタツがなければ絶対に猪は撃ち獲れない。

目下、山彦会千葉支部で実戦で体験させているのは、猪猟の完成に欠かせない、この技術がなければ完勝できない究極の技である。これらの具体的な項目は、一戦一戦実践してきたことを本誌で説明してきたとおりである。

残る難題は、頂点付近の戦い方であり、どんなに頑張っても思うようにならない、いわゆる紙一重の技量である。

つまり、猪猟を見事に完勝する猟人の腕前なのである。したがって、説明しても分かりづらく、克服するには血の出るような努力と長い年月の経験が必要となっていく

るのである。

ただし、この難題も、一度極めてしまえば何のことはない。何度も繰り返して説明してきたとおりで、できなかったことを頑張ることができるようにすることなのである。

例えば、激戦のさなかに突いて出て来た大猪をうまく狙って撃つたのに、何事もなかったように逃げられてしまった。あるいは、グループで大山を取り囲み、熟練の勢子長や親方が張った猪の這い出る隙もないようなタツを、あっさり抜け逃げ切られてしまった。これらは「いったいなぜだろう？」といったようなことである。

猪猟も、よくよく問い詰めて考えてみれば、基本的な事項は誰にでもすぐ分かる簡単なものである。しかし、頂点付近の激戦を制する難問ともなれば簡単にはいかない。登り極めるにつれてさらに難度も高くなり、できる猪猟人であっても、疑問ばかりが多くなるものである。

「なぜだろう？」「どうしてそうなるの？」という疑問の多くは、

人が限界に挑んでいるために、悩み苦しむ成功の基^{もと}までもが分かりにくい精神的な部分で問題になっているのである。

私はこの難関を乗り越えるための「梯子」となったり、「鎖」となる戦法を全力で実践してみせて、何とか頂点までの道筋をつけたいのである。

今回実践する「梯子の一戦」で注目してほしいのは、前述した「熟練の勢子長や親方が猪の這い出る隙もないように張ったタツを、あっさり抜け逃げ切られてしまった。いったいなぜだろう？」という解説である。

基本的に、戦いを完勝するには相手(猪)をよく知ることが必要である。「猪を侮るなかれ」で、戦う相手は猟人の想像を遙かに超える凄い鼻と良い耳の持ち主である。

その上、どんな枯れ竹藪や崖でもバリバリと突き抜け、地響きを立てて突進する恐ろしいまでの体力と逃走術を身に付けている。

その反面、猪は巨体でありながら動かなければ全く見えない。ま

た、ゆっくり音もなく藪中を逃げられるのである。だから、タツを感知するなど朝飯前なのである。犬にも勝る鼻で嗅ぎ当て、タツの動きは耳で察知して、音もなく見事に逃げ切る。

ちなみにタツではタバコやミカンは厳禁である。ゴソゴソと動き回ることなどは論外である。昔からタツの心得とは、じっと静かに「石化け」「木化け」に徹することだと言ひ伝えられている。

どんなに頑張ってもすべてに傾注して待ったとしても、猪がタツに嵌まるのは、猪のすぐ後ろに犬が急迫している時だけである。犬たちが猪に離されてしまうと、小物であっても必ずタツを感知するもので、タツを見事に抜け、逃げ切るのはごく当たり前である。

グループで「猪が獲れない。なぜだろう？」は、猪猟人の腕を除けば、まさにそのことが主な理由だと思う。そして次が止め犬の難題で、「突いて出て来た猪をうまく狙って撃つたのに、何事もなかったように逃げられてしまっ

た」という事案である。この時の「なぜだろう？」の正解こそが、止め猪猟の正否を決める鍵となる大事なことなのである。

二つの極意

私は長年の体験から、「鎖となる一戦」と位置づけ、独断で猪猟技術を磨き上げてきた。猪犬でやる単独(二、三人)猟の止め現場では最も奥が深く、極めるのが難しい技術であると思っている。

これまで何度もやってみせ、説明してきたとおりの難問であるため、繰り返し具体的に現実に実践して示すことで、猪(止めた猪)にできるだけ近くまで寄り付くことと、三〇センチ三センチくらいの刺し止め撃ち猟法の完成を目指してきたのである。

「なぜ逃げられたのか？」の前に、多くの猪猟人は「なぜこんなに近寄るのか？」「何で危険を冒してまでそんな近くから撃つのだろうか？」と思っただけに違いない。事実、全国からそんな問い合わせが多いのだ。

梯子の一戦で、泥まみれになって激戦を繰り広げる
ヨシ号、マロ号。無傷の完勝が何よりうれしい



(上) この激戦の成果。目で一発で決める。このくらいの猪を咬み止め、動けなくできれば猪犬も立派なもの。簡単そうだが、凄い迫力で、並の犬では無傷で完勝とはいかない

(左) 「一直線の谷落とし」。先頭に行くのがシロ号。真ん中の黒いのが猪で、後ろ足に咬みを入れているのがマロ号と武蔵号



私は長年猪と対決してきて、この寄り付き方と刺し止め撃ちの技術が完成していなければ止め猪は成立しないと思っている。猪犬で止め猪を何度も体験して現実的に止め猪を何百頭も撃つてみれば、寄り付き方と刺し止め撃ちの技術がいかに大切なことであるかが分かるはずである。

この二つの極意が、車の両輪のように無意識のうちに確実に実践できるまで極めることである。難所では登り切る梯子となったり、鎖となる激戦の完勝法や、止め猪に付きものの危険防止も安全対策もすべて含め、これが一番よく、安心できる猟法であると気付いてもらえるはずである。

それでも不安が残る猪猟人のために、「うまく狙って撃つたのに猪は何事もなかったように逃げてしまった。いったいなぜだろう？」という止め猪の重要なポイントを、私の体験に基づいて説明してみたい。

この疑問の多くは、猪猟人の想像を遥かに超えた驚くほどの猪の強靱さにあるのだが、この実体を

知るには何百戦も猪と対決し、実際にいゝるんな角度から猪との距離を推し量り、丹念に撃って検証してみるものである。

できる猪獵人ならば当たり前のことでも、山彦会千葉支部のように頂点に立ったことがなく、たまに大物を獲ったくらいの実力では、大猪の矢強さと攻撃力の凄さを意外と知らないものである。

大猪（一〇〇キ以上）ともなると、散弾銃（実弾）で二〇キも離れて撃ったのでは、命中したとしても猪のダメージ（損傷）が極めて少なく、即倒する確率は低い。

その第一の理由は、止め現場の状況にある。藪中の激戦では、二〇キも離れたのでは猪は見えない。その上、一流芸の猪犬群ならば、咬み一番犬が必ず頭や耳に咬み込んでいる。残る二頭は申し合わせたとように、前足の付け根や後ろ足に食い下がって凄スピードで引きずり合い、せわしく動き回っているものである。

まして、千葉特有の真竹の枯れ藪や篠竹藪の戦いとなると、猪が断然有利となる。大猪は枯れ竹を

ものともせずバリバリとへし折り、ドドドと地響きを立てて動き回るが、犬たちには枯れ竹や、篠竹でもへし折る力はない。

そんな状況下の激戦だから、突いて出て来る猪を犬たちは障害物が邪魔をして躲けないのである。藪中の猪止め現場に突入する獵人であっても、猪が突進して来たら逃げ道はない。だからといって、藪中の激戦を恐れ、猪に寄り付

なかつたら、犬たちは間違いない大けがをするか、命を落とすことになる。

猪獵人はまさにここが正念場であり、腕の見せどころである。私がいちもやっている具体的な戦術の流れは、犬群が猪発見の寄せ鳴きがわき上がると、しばらく鳴き声を聞きながら峰筋でじっと待っている。

やがて、全犬が寄り付いてワンワン、ガンガン、ゴッグググーッと大藪が揺れ動き、山が割れるほどの大騒ぎとなる。

待ってましたとばかりに大声で「それ頑張れ！ ジジが来たぞ」と怒鳴りながら、猪が峰を越えな

いように峰筋を半円形に回って人の臭いを残してから、目指す止め現場に下方からゆっくりと静かに近寄るのである。

人様に教えている猪への寄り付き方は必ず上からであるが、この基本の寄り付きも、何百頭もの猪に挑戦し、実際に撃ち獲ったり逃げられた結果が教えてくれたことで、猪が一番逃げられない戦術なのである。

なぜかといえば、犬群の咬み芸が一流になれば、どんな猪でも山頂には絶対に登れない。一流咬み芸の犬たちから猪が逃れるとすれば、突いて出て犬たちが離れた隙に飛び下りるか、犬たちを引きずって絡み落ちる以外はない。

この猪の逃げ道を断つために、枯れ竹藪を小峰伝いに駆け下り、大きく回り込むように真下を避けて斜め下から大藪に分け入るのである。一刻を争う大事な時だが、真竹の間を縫うようにゆっくりと静かに近寄ることである。

枯れ竹を踏んでバリバリと音を立ててしまったら、その場でじっと止まって待つ。犬たちが吠え続

けていけば、また進むという具合に、時には這って倒れた枯れ竹を潜り、何とか一〇キくらいに寄り付く。ここでは、どんなに急いでいようと、しゃがみ込んで、いつでも撃てる態勢で犬たちの様子を見守る。駆けつけて息の上で呼吸を整えるのは、これが一気に勝負に出るための小休止である。

ここまで近寄ると、犬たちは必ず主人が来たことを感知する。一頭が近寄って来たり、全犬の攻撃が俄かに激しくなり、「さあ、出て来て撃て！」というように、猪を咬み込むものである。この時こそがチャンスである。

この一瞬を逃さず、銃を必ず肩付けして一気に駆け寄って、頭か首の付け根を確実に撃つのである。一発で倒れない場合は、すかさず止めを撃つことである。犬たちが大けがをする危険性が最も高いのは、即倒しない半矢状態の猪が荒れ狂う時である。

このような戦術は、あくまで単独獵で私がやっている止め猪獵の流れであるが、止め現場に下から

寄り付くのは、必ず猪が突いて出て来ることを覚悟の上で実践することである。

止め猪は大きく首を振り、牙にかけようと猛攻撃を繰り返す、犬たちもこれに負けずに反撃している。迂闊に撃ち込めば犬たちを撃つことになる。

止め現場では、勇気を出してできるだけ近くから撃つのが重要である。動き回る犬たちを確実に躲して五、六メートルで撃ち込むか、もっと極端にいうならば、猪を銃口で突き刺す感じで一気に近寄り、銃口が犬たちの間から猪の肩口（頭や首の付け根がよい）に付くような二〇センチ三メートルで腕を伸ばし、確実に一発で仕留めることが大切である。

ここまで猪に「寄り付き」「刺し止め撃ち」にこだわるのは、大猪がとてつもなく銃弾に強いことと、並の銃の腕前では犬たちを撃つてしまうからである。

多くの猪猟人は「そんなことができるものか」と思うだろうし、「俺はこのように立派にやっつい」と言われるかもしれない。

私は猪猟を極め、天下に恥じない猪猟人であれば、ぜひそうあってほしいと思うし、そんな達人に物言うつもりはさらさらない。「そんなことができるものか」「何で危険な藪中に突進するのか」などの疑問を晴らし、安全・安心の楽しい猪猟をやり続けてほしいと思っ、何度も同じようなことを繰り返して発信しているのである。

自分に合った我流

私が推し進める猪猟は「犬作りから大猪を撃ち獲る」というものである。この技法は、すべてが子どもの頃から父や兄たちの後を追って覚えた五目猪（ウサギ、ヤマドリ、熊まで）に始まっている。

全くの単独猪猟の中で、悪戦苦闘の末にやっと掴み取った泥まみれ汗まみれの「俺流」の止め猪猟法である。

一戦一戦を大切にしながら長年戦い続けて登って来たからには、何を聞かれても絶対の自信をもって即答できると思っている。

また、実戦を望まれば、いつ、

どこであっても思いどおりの実戦を敢行して見事な戦いぶりを見ていただくので、止め猪の近道となるような極意を激戦の中から学び取っていただきたいのである。

何も見栄や格好で断言するのではないが、どんな名人であっても初めは素人である。上手になるただ一つの秘訣は、名人だってやってきた猪との対決を一戦でも多く大切に重ねることである。どんな素人であっても、何百頭の猪を撃ち獲ったり逃げられたりしているうちに、いつの間にか堂々たる猪撃ちになっっているものである。

そんな戦いの中で自分に合った我流を作り出せばよい。そして日々の鍛錬さえ忘れなければ、やがて猪猟の奥に潜む「絶対にこの技なくして頂点はない」と言い切れる大技や極意までもが編み出せるのである。

単独猪猟の世界では、あくまでも自分が得意な極意や大技を極限まで追求して完成し使い切るところに、その猪猟人なりの独自の猪猟道が完成するのだと、しみじみ思うこの頃である。（つづく）

会員のひろば

狩猟点描 投稿歓迎

●実猟体験記（成功談・失敗談）、愛犬物語、猟犬の飼育・管理・訓練あれこれ、私のトライアル必勝法、愛銃物語、私の射撃上達法など、会員の皆様が日頃お考えになっておられることをどしどしご投稿下さい。

●原稿枚数 400字詰原稿用紙 10枚程度

●応募先 全猟編集部

●掲載分には図書カードを進呈いたします。

※なお、編集の都合上掲載が遅延したり、不掲載となる場合がありますのでご了承下さい。